

日本医療安全学会事務局

〒431-319 静岡県浜松市中央区半田山 1 丁目 20-1 浜松医科大学総合人間科学基礎研究棟 306 号室

<http://www.jpscs.org/> Email: office@jpscs.org TEL:053-433-3812 FAX:053-435-2236

目次

- 01 第 12 回総会大会長報告
- 05 委員会/部会活動報告（看護部会）
- 06 広報委員会による参加報告
- 11 編集後記

第 12 回学術総会大会長報告

第 12 回日本医療安全学会学術総会を振り返って

第 12 回日本医療安全学会学術総会 代表総会長

医療法人徳洲会近畿大学医学部・近畿大学病院 客員教授

徳洲会グループ本部 医療安全管理部門 顧問

八尾徳洲会総合病院 医療安全管理部 部長

辰巳陽一

第 12 回日本医療安全学会学術総会は、2026 年 4 月 18 日、19 日の 2 日間、グランキューブ大阪（大阪府立国際会議場）において、「前向き医療安全のススメ～案外おもしろいよ医療安全～」をテーマに開催いたしました。医療安全という言葉は、どうしても事故、責任、再発防止といった少し重い響きを伴います。しかし、医療安全は本来、患者さんと医療者の双方を守り、現場で働く人々が少しでも安心して力を発揮

できるようにするための営みです。本総会では、そのような医療安全の前向きな側面に、改めて光を当てたいと考えました。

幸いにも、最終的な参加者は864名となり、前年を大きく上回る多くの方々にご参加いただきました。一般演題も口演52演題、ポスター34演題と多数のご発表をいただき、医師、看護師、薬剤師、臨床工学技士、事務職、法律家、企業関係者など、医療安全に関わる多様な立場の方々が大阪に集ってくださいました。会場では、講演、シンポジウム、ランチョンセミナー、企業展示、P1グランプリなどを通じて、制度、現場実践、教育、チーム医療、患者参加、テクノロジーに至るまで、幅広い議論が交わされました。

特に印象に残っているのは、会場のあちこちで生まれていた率直な対話です。医療安全を「守られるもの」「叱られるもの」としてではなく、「皆で考え、育てていくもの」として受け止める空気が、少しずつ広がっていたように感じました。「案外おもしろいよ医療安全」という副題には、単なる楽しさではなく、複雑で厳しい現場の中にも、知恵や工夫、対話、そして希望を見いだしたいという思いを込めました。その思いを多くの参加者の皆様と共有できたことは、総会長として何よりの喜びでした。

本総会の開催にあたり、ご登壇、ご発表、ご参加、ご協賛、ご支援をいただいたすべての皆様に、心より御礼申し上げます。また、準備から当日の運営まで支えてくださった関係者の皆様には、感謝してもし尽くせません。本総会が、医療安全を少し前向きに、少し楽しく、そして少し深く考えるきっかけとなっていれば幸いです。



第 12 回日本医療安全学会学術総会を振り返って

公益社団法人 大阪府看護協会 会長

弘川 摩子

2026 年 4 月 18 日・19 日、大阪府立国際会議場にて「第 12 回日本医療安全学会学術総会」を開催し、864 名の皆様にご参加を賜りました。辰巳陽一代表総会長の下、共同総会長、安宅一晃先生、副総会長、運営委員、プログラム委員の多大なる尽力に心から謝意を表します。今回のテーマ「前向き医療安全のススメ～案外おもしろいよ！医療安全～」は、辰巳先生の思いの詰まったテーマであると認識しています。

招聘講演での「仕掛け学への招待」そして「困難を前向きの力に」では、「ひとつっておもしろい」「ひとつってすごい」と笑いあり、涙ありの内容でした。また、シンポジウムの数は、21 にも及び、皆さんは、どこに参加するか悩まれたことと思います。

当協会からも「特定行為研修修了看護師の活躍の場を造る」をテーマに医療安全の観点から紹介させていただきました。認知度の向上そして修了した看護師が安心して活動できる場を広げることができればと思っています。

2040 年には現役世代の減少により医療・介護に携わる人材の確保が困難になることが予測されています。その中で、医療・介護の質を担保するために多職種連携、タスクシフト/シェアの推進、DX、ICT の導入など医療・介護の現場は急激に変化していきます。その中で今以上に医療安全の強化が対象者への安全・安心につながります。今後起こりうる多くの課題を乗り越えていくパワーがあることをこの学会を通して、確認できたのではないのでしょうか。

2 日間を通して多くの参加者にご来場いただき、第 12 回日本医療安全学会学術総会は盛大に開催され、成功裡に終えることができたと感じています。本学会の開催にご協力・ご支援いただいた関連企業の皆様、学会事務局スタッフの皆様に心より感謝申し上げます。

第12回日本医療安全学会学術総会を振り返って

第12回日本医療安全学会学術総会 共同総会長

奈良県立病院機構 医療専門職教育研修センター 所長

奈良県総合医療センター 救急・集中治療センター センター長

安宅 一晃

第12回日本医療安全学会学術総会は、2026年4月18日・19日の両日、大阪の地で盛会のうちに開催することができました。代表総会長の辰巳陽一先生、共同総会長の弘川摩子先生をはじめ、準備・運営にご尽力いただいた実行委員、事務局の皆さま、そしてご参加・ご登壇いただいたすべての皆さまに、心より御礼申し上げます。

本大会のテーマは「前向き医療安全のススメ ～案外おもしろいよ医療安全～」でした。事故分析や再発防止といった事後対応型の仕組みは、医療安全の重要な基盤です。一方で、これからの医療安全には、「なぜうまくいっているのか」「どうすればもっと良くてできるのか」と、現場の創意や成功に光を当てるポジティブ・アプローチが欠かせません。救急・集中治療という、時間との戦いを強られる現場に身を置く者として、安全とは後追いの仕組みではなく、「いま、ここで、誰かを守るためにどう動くか」という前向きな実践そのものだと、改めて実感しました。

このテーマを象徴していたのが、伊藤真波さんの招聘講演「困難を前向きな力に」でした。事故で右腕を失いながら日本初の義手の看護師として復帰され、パラリンピック水泳、さらに義手のバイオリニストとして挑戦を重ねてこられた歩みは、多くの参加者の心を打ちました。会場に響いたバイオリンの音色と「あきらめない心」「周囲への感謝」という言葉は、困難をいかに前向きな力へ変えるかを、私たちに深く問いかけるものでした。

特別講演、教育講演、二十を超えるシンポジウム、一般演題、ポスターを通じて、多職種・多様な立場の方々が安全について語り合えたことも大きな収穫でした。「医療安全って、案外おもしろいよね」。この感覚が全国の現場へ広がっていくことを願いつつ、次回の再会を楽しみにしております。



第12回学術総会「看護部会シンポジウム」

日本医療安全学会

看護部会部会長

藤井 千枝子

看護部会は、2022年度から「外来がん化学療法と看護安全」をテーマに毎年シンポジウムを開催してきた。このシンポジウムは、藤田医科大学の河田健司教授の看護師の役割は重要であり、その病院の医療安全のサロゲートとなるという言葉から始まった。聖路加国際大学の大田えりか教授が中心となり全国調査を行い、適切な看護師の人員配置は看護師1人に対し患者4人以下であることを示唆してきた。

2026年度の学術総会では、東京都立大学の國江慶子先生の「ヘルシーワークプレイス（健康で安全な職場）」の視点から安全な職場を目指す取り組みや、慶應義塾大学SFC研究所の橋谷典子上級所員から、フランスでの在宅がん化学療法の紹介があった。私からは、正確な与薬や、環境対策と廃棄物の管理などの安全管理について述べた。河田先生からは、外来化学療法に携わる看護師の医療安全を実現するためには、人員配置や体制のみならず、患者や看護師をとりまく様々なケア環境を多角的に検討する必要性が述べられた。

外来化学療法を受ける患者は増加している。病院での限られた滞在時間に、安全かつ適切な治療に加え、必要な情報やケアを得られるかは、患者の生活の質に影響する。患者の尊厳を守り、その人らしく生きることを支えるためには、看護師は今までと同様に専門性や、能力を活かし、良い実践を行う必要がある。外来看護の対象が多様化、重症化、複雑化しているなか、マンパワーの確保、専門性をもつスタッフの配置は、看護の質保証に欠かせない。加えて、看護を実践する場が健康で安全な環境であることも不可欠である。今後も、発展が著しい分野であるが、医療安全の推進に向けて看護部会での活動を続けたい。

医療安全学会の看護部会は、臨床と教育の推進（新村美佐香理事）、看護職の専門分化（布施淳子理事）にも取り組んでいる。助産師の安全のシンポジウムも開催されている。本学会も、看護チームへの期待が寄せられている。ぜひ、本学会でも、互いの活動を共有し、医療安全の輪を広げてほしい。

広報委員会委員による参加報告記

「前向き医療安全のススメ～案外おもしろいよ医療安全～」に参加して

帝京大学医学部内科学講座 腫瘍内科 教授

渡邊 清高

2026年4月18日～19日に大阪・中之島のグランキューブ大阪（大阪府立国際会議場）にて開催された、第12回日本医療安全学会学術総会に参加しました。総会長は八尾徳洲会総合病院 医療安全管理部の辰巳陽一先生、共同総会長は大阪府看護協会会長の弘川摩子先生、奈良県立病院機構 医療専門職教育研修センターの安宅一晃先生です。ご企画・運営いただいた先生方、関係者の皆さまに心より感謝申し上げます。

今回のテーマは「前向き医療安全のススメ～案外おもしろいよ医療安全～」。医療安全を「守り」や「管理」だけでなく、人と組織、コミュニケーション、未来づくりとして捉え直す学術集会であったように感じました。

会場となった中之島エリアは、水都大阪を象徴する場所です。行政・経済・文化が交差する大阪の中心地であり、歴史的建築と現代的な高層ビル、ホテル、会議場が美しく共存しています。関西電力、住友・三井関連施設、大学、病院、メディア企業などが立ち並び、「知」と「実践」が集まる地域でもあります。

実は会場近くには「渡辺」という地名が残っています。由来を調べてみると、平安時代、この地を拠点としていた武士団「渡辺氏」にさかのぼること。現在の中之島～堂島周辺を本拠地として水運や交通を押さえ、商都・大阪の発展を支えた一族だそうです。江戸時代に堂島川に橋が架けられた際、その名にちなんで「渡辺橋」と命名されたと聞き、少し親近感を覚えながら橋を渡り会場へ向かいました。医療安全の学会に参加しながら、土地の歴史や人の営みにも思いを巡らせる時間となりました。

1日目は、AI活用と医療安全、安全文化の醸成、医療と法、リスクコミュニケーションなど、多角的なセッションが続きました。AIやDXが進展する時代だからこそ、“人と人との関係性”や対話の重要性が

改めて浮き彫りになっていたように思います。会場では多くの顔なじみの先生方とも再会することができました。

2日目は一般演題の座長を担当しました。医療機関と施設との連携、急変時対応研修、インシデント報告推進活動、Safety-II 実践、看護師長のリスク感性など、多彩な発表が行われました。特に印象に残ったのは、「何を、どこまで共有するか」が医療安全の質を左右するという点です。病院、地域、在宅では必要な情報共有の形が異なりますが、その接点をどう設計するかが安全文化につながることを改めて実感しました。また、「5つのM」の視点や在宅医療での意思決定支援の議論からは、「リスクをゼロにする」のではなく、「どこまで許容し、どう支えるか」を対話する重要性を学びました。意思決定は一度きりではなく、療養生活の中で続いていくものです。エビデンスだけでなく、患者・家族のナラティブも組み合わせながら、安心と納得の接点を探ることの大切さを感じました。研修医、看護、在宅医療、患者・市民など、多様な立場から安全を見つめ直す議論を通じて、「安全とはルールであると同時に、対話で育てる文化である」というメッセージが共有されていたように思います。

「医療安全には終わりはない」——そのことを改めて実感する2日間でした。総会長の辰巳陽一先生をはじめ、プログラム委員、運営スタッフ、ご関係の皆さまに改めて感謝申し上げます。

第12回日本医療安全学会学術総会に参加して

広報委員

山梨大学医学部附属病院

伊藤 雅美

「前向き医療安全のススメ～案外おもしろいよ医療安全～」—このタイトルは、医療安全に長く取り組んできた私にとって非常に魅力的に映っていました。きっと多くの方が同様に心を惹かれたのではないのでしょうか。実際に大会長である辰巳先生の講演を通じ、その魅力を強く実感することができました。医療安全の推進には、「組織経済学」「人間工学」「行動心理学」といった多様な視点を取り入れることが重要であり、またそれらを取り込むことで医療安全はさらに発展していくのだと示唆されました。医療安全に取り組む中で、「人はなぜルールを守らないのか」「なぜ当事者意識を持たず批判に終始してしまうのか」といった課題に直面し悩んできた私にとって、これらの示唆は重要な指針となるものでした。

さらに、飛田先生による「行動分析から考える医療安全」のご講演も大変印象的でした。「ルールを守らない」という現象を問題とするのではなく、「どのように環境を整えれば人はルールを守ろうとするのか」という視点への転換は、非常に示唆に富むものであり、深く共感いたしました。実現には時間と根気を要する取り組みであると思われませんが、医療安全を推進するうえで常に念頭に置くべき重要な考え方であると感じました。

また、ランチョンセミナーでは最新の留置針に関する知見をご教示いただき、現場の課題解決につながる具体的な着想を得ることができました。早速、当院の医療の質・安全管理部へ提案させていただいており、学会における情報収集の重要性を改めて認識いたしました。

私事ではありますが、ポスター発表の機会も頂戴し、多くの温かいご助言や励ましの言葉をいただきました。これまでの取り組みが無駄ではなかったと実感でき、大変励みとなりました。

本学会の2日間を通じ、多くの学びと感銘を得ることができました。このような貴重な機会が、より多くの方に広がることを願っております。

第 12 回日本医療安全学会学術総会 参加レポート

東京慈恵会医科大学附属柏病院 臨床工学部

石井 宣大

2026 年 4 月 18 日・19 日に開催された「第 12 回日本医療安全学会学術総会」に参加いたしました。

本大会のテーマは「前向き医療安全のススメ—案外おもしろいよ医療安全—」であり、事後対応にとどまらない創造的でポジティブな安全文化の構築が目指されています。

本レポートでは、臨床工学技士の視点から参加した 2 つのシンポジウムについてご報告します。

1. シンポジウム 5：医療機器のトラブル～謎解きゲーム～

本シンポジウムは、医療機器のトラブルやアラーム対応における「論理的思考プロセス」の可視化と教育手法をテーマに行われました。

医療現場において、機器トラブルへの初期対応は安全管理に直結しますが、多くの場合、経験や勘に頼った対応にとどまっており、原因究明に至るプロセスが可視化されにくいという課題があります。

本企画では、このトラブル対応を「謎解きゲーム」として再構築し、楽しみながら問題解決力を高める新たなシミュレーション教育の手法が報告されました。

私は、臨床工学技士として「論理的トラブルシューティングの思考モデル化」の登壇の機会をいただきました。人工呼吸器のアラーム内容の整理から始まり、仮説の立案、検証手順の実行、そして再現性の確認という一連のプロセスをフレームワーク化する手法を報告しました。

藤江建朗氏（森之宮大学・教授・臨床工学技士）は、学生の授業で行っている患者情報の取得方法、気管挿管患者の体位変換時における KYT 授業風景や成果の報告、その中で活用する模擬患者カルテを会場参加者が体験できるなど、IT と実践といった新しい形の授業を報告いただきました。

鹿瀬陽一氏（慈恵医大柏病院・麻酔部教授・医療安全推進室長）は、看護師や看護学生を対象に研修や授業で行う、医療教育シミュレータを壇上で動かし、実際の臨場感、行動とフィードバックの実際を報告いただきました。IT や VR を積極的に授業に取り入れて実践している報告を受け、今後この領域は開発と拡大が進むだろうと感じました。

トラブルを単なる「失敗」ではなく「発見のチャンス」と捉え、ゲーミフィケーションを取り入れて多職種で協働的問題解決（謎解き）にあたるというアプローチは、私たち臨床工学技士が現場で直面する機器トラブルの教育や、院内の安全文化醸成において非常に有効な手段であると実感しました。

2. シンポジウム 14：コミュニケーションに着目した手術室の医療安全担保に向けて

本シンポジウムでは、手術室という緊迫した特殊環境におけるコミュニケーションのあり方について、多職種の視点から議論が交わされました。

手術室では「阿吽の呼吸」による迅速な対応が求められる一方で、業務の専門化や高度な機器の導入により、コミュニケーションの機会自体が減少し、それがヒューマンエラーにつながる危険性が指摘されています。

近田優介氏（徳島大学病院・臨床工学技士）の講演では、コミュニケーションにおいて最も重要なのは「伝えたのか」ではなく「伝わったのか」であるという基本的な姿勢が強調されました。近年、医療機器の性能は飛躍的に向上し Smart 化が進んでいますが、機器から発せられる情報は一方向になりがちであり、双方向の情報共有が乏しいのが現状です。

臨床工学技士は手術チームの一員として、単に機器を操作・管理するだけでなく、医療機器の現状や問題点を他職種に「簡略的に伝え」、一方向の機器情報を双方向のコミュニケーションへと変換する役割を担う必要があります。

そのためには、他職種の専門性を深く理解し、平時から積極的なコミュニケーションを通じて信頼関係を築くことが不可欠であると再認識させられました。

今回の学会参加を通じて、生命維持管理装置の操作や医療機器の安全管理を担う臨床工学技士には、機器に対する深い知識や論理的思考力だけでなく、それを他職種へ適切に伝え、教育やチーム医療に還元していく「コミュニケーション力」と「発信力」が強く求められていることを学びました。

本学会で得た「前向きな医療安全」の視点と実践的なアプローチを、今後の日常業務や安全管理体制の向上に活かしてまいります。

編集後記

第12回日本医療安全学会学術総会のテーマは、「前向き医療安全のススメ ―案外おもしろい医療安全―」でした。学術総会前には、この言葉に少し意外さを感じた方もおられたかもしれません。医療安全といえば、事故やインシデント、再発防止、責任といった重い言葉と結び付けられることが少なくないからです。しかし、本号に寄せられた多くの原稿を拝読し、その意味が少しずつ見えてきたように思います。

辰巳陽一代表総会長が述べられているように、医療安全は「守られるもの」ではなく、「皆で考え、育てていくもの」です。そして弘川摩子共同総会長は、人材不足やDX、タスクシフト／シェアなど大きな変化の中にあっても、医療安全こそが未来の医療・介護を支える基盤であることを示されました。さらに安宅一晃共同総会長は、「なぜうまくいっているのか」「どうすればもっと良くできるのか」というポジティブ・アプローチの重要性を強調されています。

看護部会の藤井千枝子部会長からの活動報告からは、安全な職場づくりやケア環境の整備が、患者だけでなく医療者を支える営みであることが伝わってきます。広報委員の石井宣大先生が報告された「医療機器トラブルの謎解きゲーム」は、安全教育そのものを創造的な学びへと変える試みでした。伊藤雅美先生が紹介された「仕掛け学」や行動分析の視点は、「人はなぜルールを守らないのか」という問いを、「どうすれば守りたくなる環境をつくれるのか」という前向きな問いへと転換させてくれます。そして、多くの参加者の心に残った招聘講演での伊藤真波さんのお話は、「困難を前向きな力に変える」という本大会のメッセージを象徴していました。事故や困難を単に避ける対象としてではなく、その経験から学び、より良い未来へつなげる力として捉える姿勢は、まさに前向き医療安全そのものだったのではないのでしょうか。

今回の学術総会を振り返ると、「おもしろい」の正体は決して娯楽的な意味ではなかったように思います。それは、人の行動や組織の仕組みを探究する「奥深さ」であり、多職種が対話を重ねながら新しい解決策を見いだしていく「創造性」であり、そして困難の中にも希望を見出す「可能性」であり、現場の知恵と工夫がもたらす「人間味」でした。

「案外おもしろいよ医療安全」。その言葉は学会のキャッチコピーにとどまらず、私たち一人ひとりが明日の現場で実践できる前向きな姿勢への招待状だったのかもしれない。本号が、読者の皆さまにとって医療安全の新たな魅力や可能性を発見し、「前向き」に考えるきっかけとなれば幸いです。

(渡邊清高)

広報委員会 (2026 年 7 月現在)

秋山	美紀
石井	宣大
伊藤	雅美
荒神	裕之
柴田	正幸
堀田	まゆみ
永尾	るみ子
永山	正雄
新田	雅彦
水本	一弘
道丸	摩耶
吉田	和広
依田	明久
渡邊	清高

(五十音順)